



図書館から学校におすすめする あたらしい本

令和元年6月
出版分(9冊)

◆◆◆ えほん ◆◆◆

小学3年生～

『海ガラスの夏』

ミシェル・ハウツ／文 BL出版 1600円 ISBN 978-4-7764-0914-4

トーマスは海辺で海ガラス（海で削られ角のとれたガラス）を見つけ、その夜拾ったガラスの元の姿の夢を見た。後日トーマスは虫眼鏡を壊してしまい、海に捨てる。月日が経ち、1人の女の子が海ガラスを拾い、それをトーマスおじいちゃんに見せる。その夜女の子はトーマスという男の子の夢を見た。キレイな絵と静かに語られる文章が印象的な作品。

小学4年生～

『火山はめざめる』

はぎわら ふぐ／作 福音館書店 1500円 ISBN 978-4-8340-8464-1

火山のモデルは長野県と群馬県にまたがる浅間山。現在から始まり、2万5千年前までの火山の歴史とそこに暮らす人々の様子が緻密な水彩画と科学的な説明文で描かれている。巻末には詳しい解説と地図、簡単な年表もあり理解の助けになる。

◆◆◆ フィクション ◆◆◆

小学3年生～

『手と手をぎゅつとにぎったら』

横田 明子／作 佼成出版社 1300円 ISBN 978-4-333-02806-1

小学4年生のワタル達は、学校行事の準備のため、初めて特別支援学校を訪問する。知的な障害のある子ども達に出会い、最初は戸惑うことが多かったが、ワタル達は次第に相手のことが分かってくる。同じ4年生なのだ実感するワタル達の姿は心温まる。支援学校の子供達への理解や接し方など、気づきを与えてくれる作品。

小学4年生～

『あららのはたけ』

村中 季衣／作 偕成社 1400円 ISBN 978-4-03-530950-5

横浜からおじいちゃんのいる山口県に引っ越したえりは4年生。おじいちゃんにもらった畑の世話をするうちに自然からいろいろなことを学んでいく。えりは自分の体験や思いを書いた手紙を横浜にいるエミに送る。エミは学校に来なくなったけんちゃんのことを書いてきた。お互いの手紙のやりとりで構成されている物語。子どもの気持ちが素直に描かれている。

小学6年生～

『手紙—ふたりの奇跡』

福田 隆浩／著 講談社 1400円 ISBN 978-4-06-515581-3

秋田に住む小学6年生のほのかは、ある日長崎に住む小学6年生の耕治の作文を読む。これをきっかけに、亡くなった母の長崎での思い出の謎を解いて欲しいと耕治に手紙を出す。手紙での交流を通じて、2人は秘密の思い出を紐解いていく。文章が読みやすく引き込まれる作品。

『しずかな魔女』

市川 朔久子／作 岩崎書店 1300円 ISBN 978-4-265-05793-1

中学生の草子は学校になじめず、毎日図書館で過ごしていた。ある日、司書の深津さんから「静かな子は、魔女に向いている」というメモをもらい、後日彼女からある物語が届けられる。それは2人の女の子のひと夏の物語だった。読み終えた草子は一歩前へと進んでいく。作中作である小学4年生の野枝とひかりの話も魅力的な作品。

中学生～

『11番目の取引』

アリッサ・ホリングスワース／作 鈴木出版 1600円 ISBN 978-4-7902-3356-5

12歳の少年サミは祖父と二人、アフガニスタンから難民としてアメリカで暮らしている。ある日祖父の楽器ルバーブを盗まれ店に売られてしまう。なんとか店主と「4週間以内に700ドルで買取る」との約束を取りつける。厳しい条件のなか、同級生のダンの協力や知恵を働かせて、物々交換でお金を集めていく。また時折挿入される過去の回想から、彼に起きた出来事も徐々に明らかになっていく。苦悩や失意の中にもありながらも希望を見つけるサミの姿は、ぜひ同世代の子たちに読んでもらいたい。

小学5年生～

『奈良監獄物語－若かった明治日本が夢みたもの』

寮 美千子／文 小学館クリエイティブ 1200円 ISBN 978-4-7780-3543-3

今から100年以上前、1908年（明治41年）に奈良監獄は完成した。当時としては新しい様式で、受刑者の人権にも配慮された「五翼放射状舎房」といわれる五本指のように広がる廊下の天窓からは、太陽の光が射しこむ作りになっていた。戦後は少年刑務所として使われ、再教育や職業訓練にも力を入れた。奈良監獄の知られざる成り立ちや現在までの歴史を知ることができるノンフィクション絵本。最終ページに年表あり。

中学生～

『平和のバトン－広島の高校生たちが描いた8月6日の記憶』

弓狩 匡純／著 くもん出版 1500円 ISBN 978-4-7743-2777-8

被爆者が自身の体験を語り、美術を学ぶ広島の高校生が絵にする「次世代と描く原爆の絵」プロジェクトの様子を描いたノンフィクション。証言者の苦悩、絵にすることの難しさを感じながらも、1年をかけて何度も交流をし、共に1枚の絵に仕上げていく。勇気を出して語り出した証言者と、それに真正面から向き合う高校生の間には、確かに平和のバトンが手渡されている。証言者と高校生の姿から、改めて平和とは何かについて考えられる作品。